



# 日本SPF豚協会だより

Report of JAPAN SPF Swine Association

2014.1 第54号



提◆言

## がんばろう 日本の農業

日本SPF豚研究会会長  
独)動物衛生研究所動物疾病センター

小林 秀樹

あけましておめでとうございます。

72年前に石油で追い込まれた日本の決断が、あの不幸な戦争に突入していきました。今後いろいろな場面で、国際的に追いやられることがあるかもしれません。しかし、日本人はその努力と、英知と、真面目さで乗り越えていかなければならないのです。TTPがどのような結果になろうとも、働き者の日本国民には結局どの国も勝てないのです。

日本が抱える最大の問題は急速に進む少子高齢化です。2010年時点で45歳だった平均年齢は2030年には52歳に上昇。同じ期間に米国は37歳から39歳に、インドは26歳から32歳に、中国は35歳から43歳に上昇するそうです。人口構成が経済成長のチャンスになるのは0～14歳人口が全体の30%未満、65歳以上が15%未満のときだそうです。日本では1965～1995年にこの時期は終わっているのに対し、米国は2015年まで、中国は2025年まで続き、インドは2015～2050年に到来します。

私の実家周辺の専業農家は30戸くらいありますが、米を作っている農家は僅か2戸だけです。田圃は3割くらい耕作放棄されています。米作りは機械化されて重機さえ運転できれば老人でもできるのですが、一町歩で100万円にもならないようでは廃れる一方です。政府は飼料米生産補助金を一町歩100万円出す案を掲げていますが、それで農家がどのように動くか疑問です。実家周辺の最若齢後継者は46歳、次が56歳で、70歳以上が過半数を占めています。今の農業は継続する限り高齢になってもできますし、僅かですが年金ももらえます。問題は若い世代にとって、やりがいがあっても実収入に乏しい農業に魅力を感じられないことです。

10年前くらいでしょうか、『金持ち父さん、貧乏父さん』という本がベストセラーになりました。人生で一番大事な時間を仕事に費やし、貯めたお金をはたいて

住む家を買うのが貧乏父さん。金持ち父さんは自分が働くのではなく、自分のお金を働かせ、お金がお金を生むシステムをつくるのだそうです。この本を読んで感化された大部分の日本人は貧乏父さんで、金持ち父さんにはなれない気がします。

資本主義経済を否定するわけではないので、いかにお金を回してなんぼの世界かというのもわかります。生産の三要素は自然(土地)、資本、労働力です。原作者の米国には多くの安い労働力と土地があるので、残りの資本の投資先も多くあると思います。しかし、日本は、特に日本の農業は「貧乏父さん」が合っていると思います。それは生産の三要素がひとつに纏まっているからです。日本の農業は他の産業とちがいで資本と労働力、そして不動産がどうしても分離できない状況にあるので大規模化には不利です。しかし、この状況は農業従事者が、職人として独自のアイデアを自由に創出できる土壌になっていると思います。キャッシュフローを目論みお金持ちを目指すのもよいのですが、日本の農業を維持拡大するには多くのアイデアの創出が必須で、そのためには試行錯誤と実践が必要です。

直木賞受賞作『ホテルローヤル』に、犯罪者の息子をもつ母親が「体を動かして一生懸命働いている人には誰も悪口を言わないし、他人も優しく接してくれるものだ」と言うくだりがあります。かつての日本にはこんな貧乏父さんがたくさんいて、日本固有の社会と日本の経済成長を支えてきたのでしょうか。

TTPの行方はわかりませんが、これを契機に日本型畜産は努力と、英知と、真面目さで問題を乗り越え、世界をリードしていけると信じています。経済学者がいう生産適齢は農業には当てはまらないと思います。高齢でもがんばって農業を維持するその背中を若者はみえています。

# 特長ある3つの認定農場が事例発表 SPF豚セミナーを開催 恒例のCM農場生産成績年次報告、農場表彰も

昨年11月5日、東京都千代田区のKKRホテル東京において、恒例のSPF豚セミナーが開催され133名の方にご参加いただきました。

セミナーではまず北島克好・協会会長が挨拶、次に藤田世秀・協会専務理事が、毎年恒例となっている認定農場（CM）生産成績年次報告を行ないました。

続いて、(財)日本食肉流通センター主催「ちくさんフードフェア」の出展について、事務局より紹介がありました（4ページのトピックス参照）。

休憩後、今回で7回目となる生産成績最優秀農場の表彰式が執り行われ、総合生産成績部門では北海道の青木ピッグファーム（2年ぶり5回目）、商品化頭数部門では岩手県の(農)八幡平ファーム（2年連続2回目）がそれぞれ受賞、北島会長より、表彰状とトロフィーが授与されました。

柏崎 守選考委員長（SPF豚農場認定委員会委員長）は講評の中で、認定制度や成績評価の経過について述べた後「この表彰制度は養豚では初めて評価にベンチマーキングを取り入れた画期的なもの。1位になる人は人格も立派で農場もきれいだ」とその榮譽をたたえました。

受賞後の挨拶では、まず青木ピッグファームの青木昇会長が「私の住む十勝平野は北海道でも指折りの穀倉地帯だが、何を思っただか先代が養豚を始めた。私も豚が好きで養豚に携わって50年になる。私の背中がよかったのか、息子も後を継いでくれ、ホクレンの協力のもと、150頭一貫のSPF養豚に取り組んだ。現在300頭を目指して増頭中である。今は一線を退き手伝いの立場だが、これからも一生懸命精進していきたい」と述べられました。

続いて八幡平ファームの阿部日出夫組合長が「榮譽ある賞を連続受賞でき、全職員に感謝したい。我々のような企業養豚では、小さな失敗が大きな被害につな



がる。若い職員が切磋琢磨し生産目標をクリアしてくれている。TTP交渉のゆくえ、飼料高など今後も不安要素はつきないが、変化に前向きに対応し、何としても生き残り、さらによくなるよう、軸のぶれない経営を目指していきたい」と挨拶されました。

最後に、「ここがちがう、優良農場の飼養管理のポイント」と題し、3農場に事例発表をお願いしました。いずれも大変貴重なお話でした。紙幅の都合で残念ながらごく一部ですが、その内容を紹介します（3～4ページ）。

セミナー終了後行なわれた懇親会には、122名の参加がありました。毎年恒例のSPFポークのしゃぶしゃぶや加工品も数々登場、その味をご堪能いただきつつ情報交換の場となったかと思えます。多くの皆さまのご参加・ご協力、誠にありがとうございました。



総合生産成績部門で最優秀賞を受賞、挨拶する北海道の青木ピッグファームの青木 昇さん



商品化頭数で2年連続最優秀賞を受賞した岩手県の八幡平ファーム代表理事組合長・阿部日出夫さん



### 事例発表①

## 年間分娩回数2.5を可能にする繁殖管理のコツ

FVファーム 代表 平谷 東英氏 (岩手県野田村)

母豚280頭規模の一貫経営をほぼ3人でこなすため、なかなか農場を離れられない。今日とはとても楽しみにしていた。

2004年の仮認定から2年後には2年連続で年間分娩回数2.5を達成できたが、何年かに1度成績が落ちる。原因としては母豚更新の失敗、東日本大震災の影響などがある。

特別なことはしていないが、2サイト農場で離乳は18日齢。母豚は離乳前日の午後と離乳日には餌を切り、翌日朝少量給与、午後から通常量にする。給水は通常通り。4日目から雄と合わせる。雄にバラツキがないか全頭実績を◎、○、△で記入しバランスをみている。

4か月ごとに繁殖担当と分娩担当を交換するようにしている。自分で種付けした豚は自分で産ませるのが

狙い。責任転嫁しないことが大事。この規模だからできることかもしれないが、ずっと続けたい。

作業行程や衛生プログラムは、実際に自分で作業して無理のないものを作成している。実際、7時半のシャワーインから16時の終業と、無理はないと思っている。

農場視察はなるべく受け入れている。外部の目を意識することで緊張感が生まれ、清掃や整理整頓で農場を清潔に維持できる。また、質問に答えることであやふやさもなくなり、自分たちのためにもなる。「知っている」と「できる」はイコールではない。当然だが入場規定は徹底してもらっている。

今まで本交のみだったが、夏場の受胎率低下防止や作業軽減のため、3月からはオールAIに取り組む。正直不安で緊張しているが、失敗はできない。農事組合法人としてスタートして40年になる記念の年に表彰農場になれたらと願っている。



### 事例発表②

## 無薬豚生産を含む大型農場の取り組み

(有)ふなばやし農産 農場長 田中 良市氏 (青森県十和田市)

本場(第2農場と統合)と第3農場あわせて母豚1,430頭、年間肉豚出荷約3万4,000頭の農場で、従業員は31名。1985年からSPF豚を導入している。

温暖化の影響が青森でも冬場と同様に夏場対策が重要になっている。種豚舎では屋根散水や舎内空冷、肥育舎では細霧装置の導入などで、暑さがピークになる前に早めに取り組んでいる。冬場は入舎一週間前からの加温で結露を防ぎ、前日の急速加温で豚舎温度を安定させ豚のストレスを軽減している。

離乳舎・肥育舎では2週に1度の移動でオールイン・オールアウト、洗浄・消毒を徹底するため空舎期間を4週間確保している。

無薬豚生産は2005年に開始(東日本大震災の影響で一時中断)。現在は全体の約75%を無薬豚として出荷し

ている。重要なのは早期発見・早期治療(治療豚の早期隔離)。そのためにも従業員全員のやる気・コスト意識・共通認識が重要になる。

そこで、農場内に全員が集まれる研修室(会議室)を設置、毎月勉強会を開いている。人前で発表することは大変だがよい経験になる。私自身も今日それが役立っている。若い従業員のやる気を引き出し、他部門の問題点を理解することで、全員が農場全体を把握し、データを共有し有効活用できている。無薬の意義を理解し、コスト感覚も培われ、問題解決につながっていく。9年間欠かさず開催し、110回を超えた。継続は力なりで、農場全体の力になっている。

安心・安全な豚肉を求める消費者の信頼に応えるためには、間違いがあってはならない。農場全体の共通認識によって、価値のある、プラスアルファの販売につながっていると思っている。



### 事例発表③

## 養豚密集地域で事故率低減、肉豚出荷頭数を大幅アップさせるために

(有)下山農場 社長 下山 正大氏 (千葉県旭市)

千葉県北東部、日本でも有数の養豚密集地域で母豚350頭規模の2サイト

農場と、300頭規模の一貫農場を経営しているが、本当に難しい。石ころだらけの河原を走るようなもので、乗物もドライバーもよくなければ走れない。①スリーセブンのような生産システム、②ボディーコントロール、③スタッフの定着、がポイントだと実感している。

スタッフの自主性が重要。サッカー同様、始まったから指示は出せない。ああしろ、こうしろと言うことより、いかに気持よく働いてもらうか、その環境づくりに気を配っている。大事なのは①休日がちゃんととれること、②目標とする先輩がいること、③農場がきれいなこと。コストはかかるが、定着してくれればもとはとれる。少しは光が見えてきたかなと思っている。

2サイトの肥育農場では発酵床による大群飼育だが、立地条件でやむを得ず採用し四苦八苦した。結果的にはコストも抑えられ、床もきれいで堆肥も評判がいいのでお勧めしたい。

繁殖部門については吉野泰裕場長が発表

飼養管理は2人、週休2日を確保しており申し送りなどのコミュニケーションを徹底している。現場での判断を大事にし、費用がかかることだけ社長に相談する。



(有)下山農場第一農場場長 吉野泰裕さん

適正なボディーコントロールで体の貯金をつくり、離乳後体力の回復に努める体型サイクルづくりが重要。離乳時に細すぎる母豚は1回種付を見送る。それぞれの母豚に合った体型づくりを見極める。定期的に母豚の背脂肪厚を測定しているが3年前と比べガリガリの母豚が激減した。

適切な里子・里親の実施、きめ細かい母豚管理や分娩舎管理が離乳頭数増加につながる。

離乳舎で最も重要なのは、どれだけ外にいるような環境を作れるかである。

### ト◆ピ◆ツ◆クス

## ちくさんフードフェアに4度目の出展 過去最高の人出、しゃぶしゃぶ試食に長蛇の列

協会では昨年10月12日(土)、13日(日)の2日間、「ちくさんフードフェア」(神奈川県川崎市、主催：(財)日本食肉流通センター)に出展いたしました。今回で4回目となりました。

各ピラミッドの協力のもと、恒例となったしゃぶしゃぶの試食、アンケート調査、抽選会を行ないました。また、パネルも展示し、協会および認定農場パンフレット、販売情報、SPFポークリーフレットなどを配付しました。

晴天に恵まれた今回は、過去最高の12万8,000人の人出があり、協会ブースも相変わらずの大人気で、しゃぶしゃぶの試食に長蛇の列ができました。

また、今回も東京農業大学の学生さんたちに豚の着ぐるみを担当いただき、PRに活躍いただきました。

遠方より会場にお越しいただいた会員の方々、ご協力いただいたピラミッドの皆さん、ありがとうございました。



## 豚舎周辺に生息するハエ類の防除Ⅴ

イカリ消毒(株)技術研究所 木村 悟朗

I PMに基づく防除として物理的防除と化学的防除などについてまとめてきました。最後に、生物的防除についてまとめます。

近年の環境保全や食品の安全性に対する消費者や生産者の関心の高まりから、薬剤に過度に依存しない有害生物の防除が求められています。生物的防除は近年大いに発展し、畜産分野においても注目されています。これは、生物的防除が安全性、有効性、および経済性を備えた理想的な防除方法であるとともに、学問的にも様々な知識が必要であることが要因と考えられます。

生物的防除は天敵を利用した防除であり、天敵には捕食者、寄生者および病原微生物があります。具体的には、特定の天敵の導入または操作によって、害虫密度を経済的被害水準以下に落とし、さらにこの低いレベルで害虫と天敵の平衡状態を長期的に維持させることとなります。ハエ類の天敵となる昆虫類や微生物は数多くあり、国内外でその利用が試みられてきました。特に鶏舎では、ハエ類の天敵昆虫であるガイマイゴミ

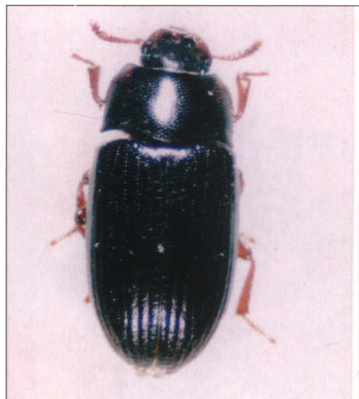


写真1 ガイマイゴミムシダマシ成虫  
(富岡康浩氏原図)

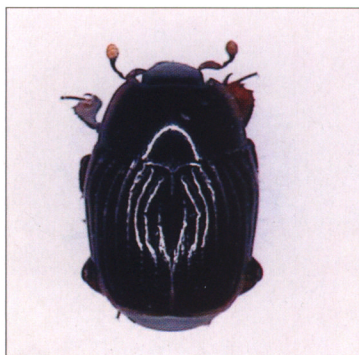


写真2 クロチビエンムシ成虫  
(富岡康浩氏原図)

ムシダマシ(写真1)とエンムシ類(写真2)の利用は有名で、それらに対して影響が少ない薬剤と併用することにより鶏舎におけるハエ類の発生を抑制し、薬剤使用量を半減できることが報告されています。

ガイマイゴミムシダマシによる防除機構は、ガイマイゴミムシダマシが堆積鶏糞を乾燥化することによりハエ類の発生を抑制するとともに、捕食によっても個体数を制御しています。糞尿の乾燥によりハエ類の繁殖を低減させる環境的対策は、ハ

エ類の捕食者や後述する寄生者の活動にも有利になります。

一方、ウシやブタなどの畜舎ではガイマイゴミムシダマシによるハエ類の生物的防除はほとんど検討されていません。そこで、牛舎ではハエ類の天敵(寄生蜂)であるハエヤドリコガネコバチの利用が検討されています。寄生蜂の放飼はハエ類の個体数変動を予測しながら複数回行うことが望ましいと考えられています。しかしながら、ハエ類の個体数を予測することは困難であるため、成長抑制剤を併用しながら寄生蜂の個体数を維持する必要があると指摘されています。豚舎においても、この方法は有効であると予想されます。

豚舎においては、ハエ類の種の競合事例がいくつかあります。例えば、アメリカミズアブ幼虫は糞尿をかき回し、他のハエ類幼虫の生息場所や産卵場所を物理的に適さない環境にします。また、オフィラと呼ばれるヒメクロバエ幼虫はイエバエと同じ環境で発生し、イエバエ幼虫などを捕食することが知られています。しかし、両種は畜産施設において同時に発生するため、オフィラが大量発生すればイエバエと同様に害虫となります。微生物については、幼虫に対する昆虫寄生性線虫の利用やイエバエ成虫に対する病原糸状菌の利用に関する研究がなされていますが、こちらも実用化には至っていません。今後、これらの研究が大いに発展することを期待します。

### <参考文献>

- 朝見恭裕・大関輝男・波多野義(2001)ハエ蛹寄生蜂を用いたハエの総合管理技術. 動薬研究 61: 28-34.
- Axtell, R.C. (1986) Fly control in confined livestock and poultry production. Technical Monograph. Ciba-Geigy Corporation, Greensboro, USA.
- 星一美・岡本優・脇阪浩・神辺佳弘・斎藤忠史(2007)天敵を利用したハエの総合防除システムの確立. 栃木県畜産試験場研究報告23: 23-34.
- 中村秀夫・山上善久・富岡康浩(1997)鶏舎内のハエ発生および糞中水分に対するガイマイゴミムシダマシ放飼の効果. 埼玉県畜産センター研究報告 1: 61-65.
- 斎藤哲夫・松本義明・平嶋義宏・久野英二・中島敏夫(1996)新応用昆虫学 三訂版. 朝倉書店, 東京.
- 白石明彦(2001)堆肥場における寄生蜂のイエバエ蛹への寄生率とイエバエ発生状況 東北農業研究 54: 113-114. 図の説明

## 肉のナカタ

キャニオンスーパー ビックミカエル精肉部（熊本県菊池市）  
TEL.0968-24-0429

肉のナカタは熊本県のSPF豚肉販売第一号のお店です。県の畜産試験場がSPF養豚を始めた頃からの、筋金入りの「SPFのお店」です。

社長の中田孝治さんは、お祖父さんの代からの畜産業でしたが、16歳でお父さんを亡くされ、親戚の肉屋で修業、平成2年に食肉販売をスタートさせました。

現在は菊池市内にある本店と支店であるスーパー内の精肉部を、ご家族と従業員10名で切り盛りされています。熊本県畜産流通センターから認定農場である新古閑養豚(農)と(有)七城SPFファーム産のSPF豚のみを仕入れ、販売されています。

新古閑養豚の佐々さんは同級生ということもあり、SPF豚を紹介されたとき「自分で食べてみてくさみがなく、とくに赤身は黒豚よりおいしかった」と中田さん。肉色もきれいで客の評判もいいとか。枝肉仕入れが基本で「仕入れたからには全量売る、そのために年間トータルで売り方を考える」。

「最初の頃、自称SPF豚肉が出回って苦労しました。認定制度ができ認定証のコピーを店頭に掲示することで随分売りやすくなったし、普及も進んだのではないのでしょうか」。

持参したSPFポークリーフレットを手にした中田さんは「こういうものが欲しい。SPF豚は質にばらつきがなく、味に満足しているからもっと普及



中央が中田孝治社長

させたい。そのためには販売面でもっと協力してほしい。たとえば、まじめに取り組んでいる小売店を認定する、販売店認定制度みたいなものがあればいいですね」と普及促進への提案もいただきました。

認定シールの普及はじめ販売面の強化は協会にとっても大きな課題ですが、SPFポークへの熱い思いのあってこそのご意見、胆に命じました。



### ●協会からのお知らせ●

#### ●東北地区の地域研修会を2月に岩手県で開催します

協会では東北地区の地域研修会を、2月20日（木）午後、岩手県盛岡市で開催する予定です。

該当地区の皆さんには改めて詳細をご案内いたします。多くの皆さんのご参加をお待ちしております。内容についてのご意見・ご要望等ありましたら、ぜひ事務局までお寄せ下さい。

#### ●SPFポークリーフレットVol.4が完成

すでにHPや文書でもご案内しております通り、SPFポークリーフレット第4弾が完成しております。

会員の皆さん、認定農場産SPF豚肉を取扱っている販売店等には無料で差し上げます。販促資材としてお役立て下さい。

ご希望の方は事務局までご連絡下さい。



(編集部より)

山本孝史・東京農業大学教授の連載『豚の細菌病』は休載いたします。

## たっぷりタルタルの豚南蛮

●レシピ提供・「ひこま豚ファーマーズショップ」店長 附田明広（北海道森町）

今回は、セミナーにご提供いただき骨付きハムなどでおなじみの認定農場・道南アグロ直営、昨年9月にオープンしたファーマーズショップの店長に、イートインやテイクアウトで評判のレシピを教えてくださいました。

### ●材料（2人分）●

豚ウデ肉（または肩）厚さ1.5cm程度 2枚  
塩・こしょう 適量  
卵 1個  
片栗粉 適量  
万能ねぎ 適量  
糸唐辛子 適量

### <タルタルソース>

玉ねぎのみじん切り 半個分  
ゆで卵みじん切り 1個分  
マヨネーズ 100g  
塩・こしょう 適量  
パセリ 適量

### <南蛮タレ>

しょうゆ 180cc、みりん 180cc、  
酢 90cc、砂糖 30g、一味唐辛子 適量



### ●つくり方●

- ① 豚肉は筋を切り包丁で軽くたたいておきます。
- ② タルタルソースの材料を合わせます。南蛮タレは材料を火にかけて一度沸騰させます。
- ③ ①に塩・こしょうをふり、とき卵をくぐらせ片栗粉をつけて、180℃の油で2～3分揚げます。
- ④ 南蛮タレにくぐらせ、適当な大きさに切って皿に盛り付けます。
- ⑤ タルタルソースをお好みの量かけて、万能ねぎと糸唐辛子を乗せたらできあがりです。

### 【附田シェフからひとこと】

肉は揚げ過ぎるとかたくなるので注意しましょう。味が薄ければ南蛮タレをかけて召し上がってください。

## ●認定情報●

### ●平成25年度認定農場

[12月認定]

(有効期間:平成25年12月5日から26年12月末日まで)

北海道・ホクレン滝川スワイン・ステーション、(有)道南アグロ、富良野スワインファーム(有)、(有)山中畜産千歳農場、(有)中多寄農場、(有)サクセス森、青森県・(有)ふなばやし農産、同第3農場、神明畜産(株)八戸ファーム、岩手県・(有)ケイアイファウム玉山農場、斉藤SPF農場、(有)胆沢養豚、カワムラSPFファーム、北日本JA畜産(株)本社農場、(農)八幡平洋野牧場、秋田県・(有)ポークランド、(株)ユキザワ雪沢GP、山形県・(有)最上川ファーム、(有)鮭川ピッグファーム、宮城県・(農)しわひめスワイン、(株)しまざき牧場蔵王高原農場、福島県・神明畜産(株)川内ファーム、(株)ユキザワ玉川農場、茨城県・(有)常陸牧場、(有)澤畑養豚センター、群馬県・

(有)長谷井畜産、ピックファームゴカン、利根沼田ドリームファーム(株)、千葉県・實川養豚銚子農場、同東庄農場、綱島良信養豚場、高森養豚場、小長谷養豚場、(有)菅井物産SPF農場、長野県・(有)ヤマイチファーム、岡山県・岡山JA畜産(株)吉備農場、愛媛県・(株)ユキザワ大川農場、(株)ユキザワ丹原農場、大分県・(株)北九州ジェイエイ畜産大分SPF豚種豚農場、(株)北九州ジェイエイ畜産大分支社SEW安岐ファーム、長崎県・(有)芳寿牧場口之津農場、同国見農場、同島原農場、同新島原農場、(有)エス・イー・ダブリュー大西海ファーム、宮崎県・江夏商事(株)夏尾農場、(有)ナガトモ、鹿児島県・(有)サツマ湧水事業所、(株)シムコ鶴田事業所阿久根農場、そお元気ファーム(株)持留農場、同久保崎農場

(以上51農場)

※次回認定委員会は平成26年3月13日(木)の予定



(有)胆沢養豚

高橋 充好さん

●岩手県奥州市

## 人より豚、努力と我慢一筋36年

胆沢養豚は、2007年から始まった生産成績優秀農場表彰の商品化頭数部門で、第1回・2回と連続して最優秀賞を受賞、その後も毎回トップ争いされています。

その秘訣は？「豚との距離を縮めること」と社長の高橋充好さん(62歳)。いつもお電話しても必ず周囲で豚の啼声が聞こえてきます。「人より豚に話しかけている方が多いよ」と高橋さん。常に接しているせいか豚もよくなつき、高低差のある通路を使つての移動の際も「ちゃんと後ろをついてきてくれますよ」。

米農家である高橋さん、米づくりのかたわら造園会社に9年間勤務、造園技能士の資格もお持ちです。仕事がない冬場は神奈川県の自動車工場の期間勤務も。豚を始めたきっかけは「米だけでは食べられない。365日家にいられる仕事をしたかったから」。たまたま近所の農家の豚を見て「たくさん産まれるし儲かりそうだな」と。まったくの素人でしたが、半年間研修の後、1977年、50頭の繁殖経営からスタートしました。とこ



高成績を支える高橋さん(左端)、次男の寛さん(右から3人目)、長男の妻さおりさん(右端)と従業員の皆さん



ろが、赤字続きで、一貫生産に切り替えたものの苦労の連続。持ち前の負けん気で「とにかく豚のこと、餌のことを勉強した。必死で情報を集めました」。地元の仲間4人とグループで東京食肉市場に出荷。仲間とペアを組み毎週上京、セリのあとに買参人に頼み込んで枝肉を見せてもらい、他農場のいいものを研究する。そんな生活を10年間。市場でその名を知られる銘柄になりました。「よく続いたと思う。いろいろな人の支えがあったし豚も応えてくれた。努力した分報われたかな」。仲間の4人はすべて養豚から離れる中、1989年には現在の場所に250頭規模の農場を新設、96年にはSPF豚認定農場に。「利益をあげるには病気を入れないことが一番ですから」。2人の息子さんのためにと増頭も視野に入れ、糞尿処理施設に余裕を持たせてあります。

趣味は、おつき合いのため機器まで買って家で練習したカラオケと、10年ほど前に始めたゴルフ。野球少年のお孫さんの応援にも忙しい毎日です。養豚人生36年の高橋さん、「冬場は特に大変だよ。でもあつという間だった。今はよかったと思うことが多いかな。元気なうちは続けたい。これがオレの仕事だからね」。勤勉で謙虚、我慢強いその姿に、只々敬服でした。(編集部)

編集後記

明けましておめでとうございます。昨年12月の、12年ぶりの高相場にはびっくりしました。ただ、日本の養豚を取り巻く環境は、TPPをはじめ今年も不確定な要素が山積みです。今号掲載の表彰農場および事例発表農場の共通点は、自農場の特長を十分理解し、その農場ならではの創意工夫がされていることです。やるべき目標がしっかりしていて、成績改善を目指すモチベーションの高さには感服しました。協会認定農場は、生産に対する真摯な取り組みが売り物です。外野席に惑わされることなく、自分たちの目標をしっかり見据え、今年も力強く前進していきましょう。(世)



日本SPF豚協会認定農場産シール

このマークは

日本SPF豚協会の  
登録商標です

## 日本SPF豚協会だより

第54号 2014年1月1日発行(季刊)

発行 一般社団法人 日本SPF豚協会  
〒101-0032 東京都千代田区岩本町1-8-2  
TEL.03-5835-5375 FAX.03-5835-5376  
e-mail : j.spf.a@nifty.com  
http://www.j-spf.com/

発行人 北島 克好  
編集人 藤田 世秀